

“身体拘束ゼロへ”の取り組み

介護支援 net
の取材が
来ました！

インタビュー

本間清文

(ソーシャルケア研究所代表)

駒場苑 3F リーダー

× 相良 勇



一部抜粋のため詳細はインターネット
「介護支援 net」を御覧ください

精神的に不安定な木村さん

ご家族とのやりとりで思いだすのは、98歳の木村さん(仮)のことです。木村さん(仮)は認知症があり足腰が比較的、しっかりされている方でした。足腰がしっかりしているのはいいのですが、精神的に不安定な所がありました。座って落ち着いていたかと思うと突然、歩きだされるのです。なかなか椅子などに座って落ち着いておられません。「家へ帰る」が口癖。家での生活が難しくなったから入所されているのですが、それを理解できていない。結果、思いついたように家に帰ろうと歩き出されます。職員に介護されることへの抵抗も強く露骨に「ブー！」と唾を吐いたり大声も出されます。つねったり噛んだりして抵抗されることもしょっちゅうでした。

安全確保か自由か

それに対し職員が付き添えばいいのですが、ずっとは難しい。目の届かない場合には転倒されてしまいます。どうしても施設内での安全確保が難しく、施設やご家族と協議の結果、限定的にご本人が自由に歩けないように体を(車いすに取り付けるベルト状のY字抑制帯)に固定する対応を取らせていただいております。

しかし、自由に歩きたいと思われている方をそのように縛ったり、何かに拘束することはこちらとしても、やはり心苦しいです。例え、自由に歩いた結果、転んでしまったとしても、「その瞬間」のご本人にとっては自由に歩けることの方が幸せなんじゃないかと感じました。そして職員会議でそのことを話してみました。

しかし、この考えに対しては思った以上に職員の心理的抵抗が強かった。「転んでしまって事故にでもなったら、どう責任を取るの？」と。(本間注※老人が転倒後、回復せず寝たきりになることは非常に多い)でも、あきらめずに、どうすれば自由に歩いてもらえるかを考えました。

リスクマネジメント

そして、自分なりに考えた対策は大きく分けると次の三つ。(1)機能向上と(2)転倒防止、(3)事故時の軽減策でした。

(1)の機能向上については、それまで歩ける方なのに転倒が心配だからという理由で(自由に歩いてもらうのではなく)車いすに乗ってもらい職員が介助する対応にしていました。しかし、歩かないでいると、ますます足腰は弱って歩けなくなりますので、職員による付き添い介助で積極的に歩く機会を増やし、歩く能力を向上してもらいます。

次に(ベッドから起き上がった後の移動時の転倒が目立っていたので)(2)の転ばないようにベッドの周りの手すりの位置やポータブルトイレの位置を工夫し、本人が危なげなく、それらの間の移動ができる策を考えました。移動する空間に(手すり代わりに)ソファやタンスを配置し、つかまったり休めるようにします。トイレや食事の席など本人がいつも歩いて移動する動線上にも手すりやソファなどを配置します。

さらに、(3)の事故の軽減策として、例え転んでしまったとしても大けがに至らないようにベッドの周辺などにカーペットを敷いたりクッション性のモノなどを配置しました。転んだ時には足の付け根付近(大腿骨付近)を骨折する方が大半なので、そこを保護する保護剤の入ったパンツを着用してもらう、などです。

ご家族との話し合い

それでも、最終的に現場で対応できない問題が残りました。一つは夜間時の対応です。夜間は職員が一つの階に一人しかいないので、他の誰かの対応に追われている間に事故などが起こりそうな時、手が足りません。ですから、その時は他の階の夜勤者に応援を頼んでいくという結論を得ました。

それと日中も他の対応などでどうしても、手が足らずご本人の事故のリスクが高まる時が出てくることもあります。そのときは、一時的に事務員等介護職以外の関連職種にも声を掛けて協力してもらおう。そのような事故対策つまりリスクマネジメントを行ってゆきました

そして、後日、ご家族と話し合いの場を持つことに。「施設として（先に挙げた）対応策は採りますが、それでも、転んでしまい事故になってしまう可能性はゼロではありません。それでも、私達のご本人さまを縛り付けたり拘束し、ご本人の自由を奪ってしまう対応をやりたくないと考えています。」と話しました。ご家族も「拘束はしない対応を取ってほしい」と。それで、ようやく施設とご家族、そしてご本人の着地点が見いだせました。

介護職員の不安

それでも、すぐには私達は対応を変更できませんでした。なぜか。それは、先にもいった通り、現場の「介護職員の不安」でした。「それでも、本当に転んでしまったら責任をどうするのか」と言う職員が少なからずいたのです。無理もありません。これまで現場は現場なりに一生懸命、考えた末の対応を取っていたのですから。しかも、これまで「転ばないように」とご本人の安全を第一に考えていた価値観が「転んでもいい」と逆転するわけですから。

もちろん、私の中にも不安がなかったかというウソになります。完璧といえる自信はありませんでした。でも、介護って、やってみないと分からないことがあるんです。（※1）転倒しないことだけ・安全だけを優先するならお年寄りをベッドに縛り付けておけばいいことになります。それは簡単なことですが、そこに介護福祉の専門性はありません。80年、90年と生きてこられた方の最期の時間がそのような形になるのも幸せとも思えません。

ですから、私は職員が不安を訴える度に、職員にマンツーマンで説明するしかありませんでした。「ご家族の了解を得ていますから」と。そして、その後、拘束されない生活を送っていただけるようになりました。ご家族にも喜んでいただき、やってよかったと思えました。

しかし、その後、実際に転んでしまい手の指を骨折されてしまいました。それでも大事に至らず気ままに歩いたり、自由を奪われない生活を継続できるようになりました。

今日一日を楽しく過ごしてほしい

そのように介護の質を改善することについて、こんな風を感じる職員もいるかもしれません。「拘束を外して、自由に動けるようになったとしても、職員の仕事が忙しくなるわりに、なんの見返りもなく意味がない」とか「どんなに現状の改善を図ったとしても、どうせいつかは体のどこかが悪くなり亡くなってしまふのだから」と。（※2）私は、その点、不確実な未来やこれからのことを考えるより、「今日一日を楽しく過ごしてほしい」と考えています。不安材料を数え上げれば切りがなく、身動き取れなくなってしまいますから、そよりもむしろ、老人の「今の気持ち」を大切にできるような仕事をしてゆきたいと思っています。

看取りなど施設でお亡くなりになられる方への対応もしかり。亡くなる前後は本当に辛く、悲しいものです。でも、そこだけ介護の質を向上しても意味がありません。ある時、脈絡なくターミナルや死がやってくるのではない。毎日の生活の連続線上に老人の死はあるものですから。今日一日の生活をよりよいものにしていただければと考えています。